

## 146. 昭和61年度滋賀県下に おける発掘調査の紹介 その1

今年度も県下の北から南の全土において、県・市町村の埋蔵文化財担当職員約 100名の手で、多数の発掘調査がなされ、多くの貴重な成果を上げることができました。

昭和61年度の県下での発掘調査は、事業費において全国で約488億円に対して約17億円(3.5%)、発掘届出件数において全国で約18,000件に対して870件(5%)と、全国での平均値を大幅に上まわる量で実施されました。このことは従来本県が多くのことに対して1%県と称された中では、文化財の豊かさ故の結果の数値と云えます。

ここでは、その調査の貴重な成果の一端しか紹介できませんが、ここに掲載することで、当協会の責任の一端を果たしたい。

### 1. 長大な羨道を有する横穴式石室検出

#### 大津市高砂 太鼓塚古墳群

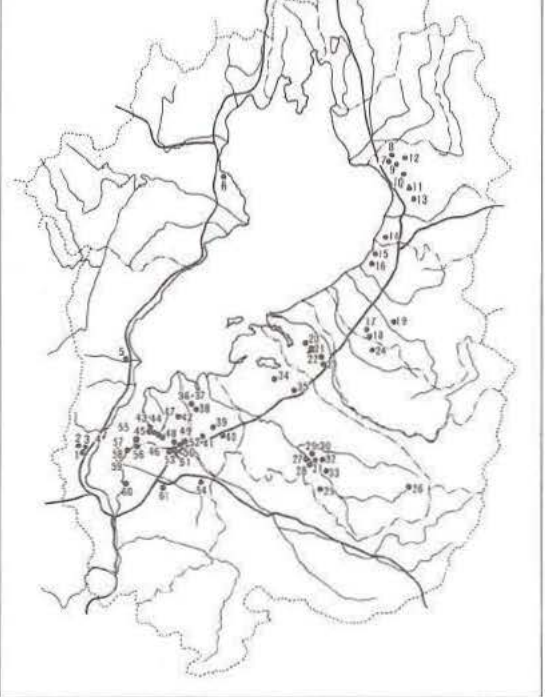
崇福寺・百穴古墳群等の東方に所在する太鼓塚古墳群では、これまでに約30基の横穴式石室が確認されている。一般国道161号(西大津バイパス)の建設に先立ち、今年度は約 4,000㎡を対象として発掘調査をおこなった。調査の結果、当初予想されていた横穴式石室以外に、弥生時代後期の溝、古墳時代から平安時代の建物跡等も検出した。また、縄文時代から平安時代にかけての遺物も多く検出した。ここでは、主なものの概略をお伝えする。

弥生時代の溝は幅約 6 m、深さ 1.5mで、東西に 8 m分検出したが、さらに東へと伸びるものである。溝内からは、弥生時代後期の土器が多量に検出されておりその中には、完形品も多く含まれている。器種は、壺・甕・高杯等で、日常生活に使用されるものばかりである。また摩滅をあまり受けていない。これらのことから、当地周辺に、この時期の集落の存在していたことが考えられる。

横穴式石室は、2基(28号・29号)検出している。28号墳は、玄室の幅4.0m、長さ3.2m、高さ 3.0m以

1~12遺跡 文化財だより114(本文)

13-26 //	//	115
27-42 //	//	116
43-51 //	//	117
52-61 //	//	118



遺跡位置図 (位置図の番号は本文と同じです)

上で羨道に対して横長に取りつくものである。床面全面には敷石が施されている。羨道は幅1.6m、長さ9.0

m以上、高さ 2.0m以上で、非常に長大なものである。石室の壁面は、持ち送り気味に構築されており、ミニチュアカマド等も出土している。29号墳は玄室は幅2.0m、長さ3.1m、高さ 2.0m以上で、羨道に対して縦長に取りつく片袖式のものである。玄室内の遺物は非常に残りがよく、埋葬



太鼓塚第28号墳(南より)

時の状況がよくわかる。棺は袖のある西壁に置き、東壁入口付近にはミニチュアカマド・須恵器の杯身類、奥壁近くに、壺・提瓶・横瓶等を置いている。両古墳とも、渡来系の影響を色濃く示しており、当地が正に漢風横溢の地であったことを窺わせる。

(大津市教育委員会 田中 久雄)

## 2. 渡来人の墓地調査

### 大津市坂本町 穴太野添古墳群

大津北郊の坂本から南志賀にかけての西方丘陵には、数多くの群集墳が築かれている。

穴太野添古墳群もその一つで、京阪電鉄穴太駅の西方、四ツ谷川の北側に位置し、比叡山系の山腹から山麓にかけて築かれている。

野添古墳群は、これまでの発掘調査や分布調査によって約150基の古墳が確認されており、そのほとんどが内部主体に横穴式石室をもつものと考えられている。

調査は、対象地の東側にある墓地の拡張事に伴い実施されたもので、これまでに対象地内で24基の古墳を確認し、うち10基の古墳の主体部の調査を実施した。

対象地内の古墳は、そのほとんどが直径15~20mの円墳で、内部主体に横穴式石室をもつものであった。



遺物出土状況

(調査を実施したもののうち一基は、いわゆる「小石室」であった。)

石室は、平面プランが正方形で両袖式のものから、わずかに幅約0.4m×長さ約1.7mの長方形を呈する小石室まであったが、そのほとんどは、玄室が幅2.0m、長さ3.0m前後のものであった。

石室からは、後世の攪乱を受けたものもあったが、須恵器と土師器が出土した。その中には、カマド・カメ・コシキ・ナベのミニチュア炊飯具の四点セットがあった。また、他にガラス玉や金環等の遺物もあった。

これらの遺物は、出土した土器から、6世紀後半から6世紀末にかけて築造されたもので、追葬の期間を含め、7世紀中頃まで使用されたものと考えられる。

古墳群の位置する丘陵下では、特殊な構造をもった住居跡が数多く発見され、渡来系の人々の集落跡と考えられており、ここに葬られた人々は、石室の構造や

出土遺物から、この集落と深いかかわりをもつ人々であろうことが考えられる。

(大津市教育委員会 須崎 雪博)

## 3. 特殊カマド跡 (温突遺構)

### 大津市弥生 穴太遺跡

今回の調査は一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴うもので、旧年度に実施した試掘調査の結果をもとに、遺構が存在すると考えられる2ヶ所の部分(A地区:2,200㎡、B地区:1,500㎡)について実施した。

調査の結果、A地区で遺構面が3面、B地区で2面確認された。A地区の第1遺構面で奈良時代の溝跡数条、第2遺構面で古墳時代後期の特殊カマド跡(いわゆる温突遺構)3基・溝跡数条を、第3遺構面で古墳時代後期の切妻大壁造住居跡1棟・掘立柱建物跡数棟を検出した。B地区では、第1遺構面で奈良時代~平安時代の池状の遺構、第2遺構面で古墳時代後期のカマド跡1基・溝跡1条・掘立柱建物跡3棟を検出した。ここでは、特殊カマド跡の概要について述べる。

検出した特殊カマド跡の内、最も残存状況の良いものは、全長約4m、焚き口、燃焼室、煙道に分かれる。焚き口は幅約50cm、高さ約15cmを測る。燃焼室は縦約70cm、横約80cm、残存高約30cmを測り、床面には粘土が貼られ、2個の支脚石が据え付けられている。煙道は焚き口に向かって左側に取り付き、約2m延びた所で北東方向に曲がる。煙道の石組みは幅20~30cm、残存高30cmを測り、一段目をやや内側に傾け、二段、三段の石を内側に持ち送って構築している。石組みの内側は火を受け、煤が付着している。煙道先端部は焚き口部より約40cm高く、煙道はなだらかに傾斜している。上部構造については、後世の削平を受けているため不明である。他の2基については、後世の土石流による削平が激しく、底部がわずかに残存するのみである。

この特殊カマド跡は、現在のところ、温突遺構と考えるのが最も妥当であり、従来推定されてきた渡来人の存在を裏付ける貴重な資料であるといえる。

(大津市教育委員会 青山 均)



特殊カマド跡

## 4. 合子形石製品の出土

### 大津市穴太 穴太遺跡

西大津バイパス建設に伴う穴太遺跡の今年度の調査地点は、穴太廃寺の東方約400mに位置する。付近は、湿地状を呈しており、穴太遺跡のなかでは最も地質の不安定な部分である。調査は2地区に分割し、東地区は二面、西地区は一面の調査を実施した。東地区第一遺構面では、掘立柱建物5棟、大小多くの土坑・溝状遺構等を検出した。掘立柱建物のうちでは、南北三間、東西二間以上の規模を有し、部分的に径20cm前後の柱根を残すものがある。また、この建物の柱穴埋土には炭が多量に混入されており、柱材の腐敗を防いだものと思われる。各掘立柱建物の柱穴からの出土遺物は極めて少なくその築造時期をにわかに決め難いが、過去の隣接地の調査等から推して、概ね6世紀後半から7世紀代に属するものと思われる。

同地区第二遺構面では、縄文時代後～晩期の遺物が出土している。遺構には河川跡二条、竪穴式住居跡二棟、樹木根等がある。竪穴式住居跡は、5×5.5m、5.5×3.3mのいずれも隅丸(長)方形を呈するものである。住居跡内からの顕著な出土遺物がないため、所属時期についてはなお検討を要するが、縄文時代晩期に属するものと思われる。

西地区第一遺構面では、古墳時代前期の溝状遺構、同後期と思われる掘立柱建物、溝、土坑等が検出されている。とくに、古墳時代前期の溝状遺構からは、古式土師器がまとめて出土しており、また断片ではあるが、ここから出土した合子形石製品は、注目に値するものである。

(財滋賀県文化財保護協会 田路 正幸)



東地区第一遺構面掘立柱建物

## 5. 猿面硯・和銅開珎等出土

### 志賀町和途中 中畑田遺跡

中畑田遺跡は、和途川北岸の洪積台地上に位置する。宅地造成工事に伴う発掘調査で、昭和61年7月から

11月まで実施した。調査面積は約600㎡である。

当遺跡は、従来より奈良時代から平安時代までの遺物の散布地として周知され、歴史地理学的研究より、『延喜式』巻28 兵部省「諸国駅伝馬」の条に記載されている「和爾」の駅家跡の推定地とされてきた。

調査の結果、検出された主な遺構は平安時代の掘立柱建物跡、土坑、土器溜り等があり、他に弥生時代の方形周溝状遺構、古墳時代の溝等である。

出土遺物は、そのほとんどが遺物包含層からのものが大部を占める。土師器、須恵器の他に、緑釉陶器、灰釉陶器、硯、瓦、土錘、錢貨、金属器等がある。

これらのうち注目されるものに、硯と錢貨がある。硯については、猿面硯と呼ばれるもので、県内では初出土のものである。硯の本体は硯面青海波文、硯背格子目印文を施している。長さ12.8cm、最大幅10.9cm、厚さ最大1.4cmの隅丸梯形の平面を有する。硯尻の両縁ちかくに脚の剥離痕が認められる。

錢貨は、いわゆる皇朝十二銭のうち「和同開珎」、「萬年通寶」、「神功開寶」、「隆平永寶」が2ヶ所で一括して出土した。総出土点数は約200点を数える。

これら遺物は包含層からの出土であるので、資料としては注意しなければならないが、本来的に当遺跡に帰属するものとするれば、周囲には当遺跡の性格を特定できる遺物・遺構が存在する可能性が高い。現在までのところ、これら遺物からは地方官衙跡、寺院跡、邸宅跡等が考えられるが、そのいずれにも特定できない。今後、周囲の発掘調査成果の蓄積を待ってから、当遺跡の全体像を論ずる必要があろう。

(志賀町教育委員会 小熊 秀明)



出土した猿面硯

## 6. 堀や堰状遺構検出

### 新旭町旭 吉武城遺跡

本調査は、国道161号線高島バイパス建設に伴うものである。調査地は、安曇川の形成する扇状地性三角州の北端部付近の、地下水位の高い湿潤地に立地する。吉武城遺跡は、昨年度までに調査が行われてきた針江

遺跡群の最北部の位置を占め、旭遺跡に隣接する。

検出した主な遺構は、古墳時代前期と近世初頭（16世紀後半）の二時期に大別することができた。

古墳時代前期の遺構は、ゆるやかに蛇行しつつ北流する自然流路と、それに合流する人工水路を検出した。自然流路からは、庄内式から布留式に及ぶ大量の土器と、遺存状況の良い木製品が出土している。

一方、近世初頭の遺構は、区画溝を伴った掘立柱建物、濠、そして水路に伴う堰状施設を検出した。遺物としては、近世陶器の他、漆器椀、焦痕のある小型板碑等が出土している。これらの遺構は、区画性をもって配置されており、昨年度に調査された隣接する針江川北遺跡の同時代の遺構群と同じ方位をとっている。堰状施設は、直線的に濠へ流れ込む水路に設けられており、濠の水量を調節する機能をもつものと思われる。

吉武城は、饗庭丘陵東麓に位置する五十川城の城主吉武岐彦守の出城と伝えられている。吉武氏は、延暦寺の山門領である木津庄の庄官としてこの地を支配したが、16世紀の末頃に織田信長の兵乱によって吉武城は落城し、城主は家来と共に逃れて行方は知られていないことが伝えられている。今回の調査地は、この吉武城伝承地に隣接しており、検出した区画性をもった遺構群も当該期の遺物を出土している。

尚、本調査の概要報告書が刊行されたので、詳細についてはそちらを参考にされたい。

（勸学県文化財保護協会 大崎 哲人）



遺構配置図

## 7. 小児用小型組合せ木棺を出土

長浜市十里 十里町遺跡

十里町遺跡は、縄文時代中期～平安時代の遺跡として知られ、長浜市の北西部に位置する。

今回の調査は、団体営園場整備事業にともなう調査である。調査地は、遺跡の南部で約400㎡を調査した。

検出した遺構は、弥生時代後期と平安時代後期の二時期に大別される。

弥生時代後期の遺構は、木棺直葬土壇墓・方形周溝墓・溝状遺構・ピットなどである。木棺直葬土壇墓は、

掘り込まれた長方形プランの墓壇の北側に組合せ式木棺を据えている。墓壇は東西の長さ約1.3m、南北の幅約0.7m、深さ0.15m以上を測り、木棺は東西1.23m、南北約0.35m、高さ0.15mを測る。木棺内埋土中より弥生後期の土器片が出土し、東側より小児のものと思われる歯が31点出土した。

方形周溝墓は6基である。各周溝の一部を検出し主体部は未検出である。

溝状遺構は大きく屈曲して延びる。

平安時代後期の遺構は、土坑・

溝・ピット

などである。土壇は長方形を呈し長さ2m以上、幅1m以上のもので大きく、埋土内より土師皿の完型品が多数出土した。溝は、南北に延びるもので幅約1.5m、深さ約0.4mであり、埋土中より竹カゴなど出土した。

遺物は、弥生後期の土器、壺、甕・高杯・鉢・手焙器台などで、大半が東海地方の特徴をもつものである。

平安後期の土器は、大、中、小の土師皿の完型品が多い、土坑より出土しているものは、祭祀に伴うものと考えられる。

（長浜市教育委員会 森口 調男）

## 8. 「寺前田」記載の木簡出土

長浜市新庄寺 神照寺坊遺跡

神照寺北郊の県営ほ場整備事業に伴う調査である。神照寺は宇多天皇の勅願所といわれ、中世には多数の坊舎をもったとされる寺で、現在なお正方位の地割をも



主要遺構配置図

って存続し、人々の厚い信仰をあつめている。

調査はまず、試掘によって遺跡の範囲とその地下深度を知ることから始まった。その結果、神照寺北方～北東にかけて遺跡の存在が確認されるに至り、協議を経て4ヵ所の調査区が設定された。その内、HM地区、MK地区と呼んだ2地区では、建物跡・溝跡・土坑な

どの遺構が調査区内に散在する状況が知られた。これらの遺構群は大別して、平安時代前期を中心とする時期のものと、鎌倉時代のものという2群に分けることができる。

古い方の時期に属するもので注目されるのは、HM地区で検出された、調査区内でL字形に屈折する溝である。これは神照寺と同様、正方位に極めて近い走向をもつ溝である。溝自体の年代は遺物が少ないため、今一つ判然としないが、神照寺の地割に影響されたものであることは確実と思われる。遺物としては、MK地区の東西溝から出土した木簡が注目される。これは幅3.4cm、残存長13.7cmを測る薄い板片であり、2行書きになっている面の冒頭は明らかに「寺前田」と読むことができる。東西溝は、奈良時代後半に埋没したものとみられ、この「寺」が何を指すかは現時点では明らかにし難いが、周辺の調査資料によって明らかにされることを期待したいものである。

鎌倉時代の遺構は、今回の調査区内ではHM地区東部に限られたが、道路を越えた東側の幾つかの試掘坑において、かなりの密度で遺構の存在が確認されており、今後の調査によっては神照寺に伝わる国宝「華籠」の時代の、寺北域の様相が明らかになろう。

(勸励賀県文化財保護協会 浜崎 悟司)

## 9. 弥生時代前期の集落

長浜市八幡中山 川崎遺跡

川崎遺跡は今回の調査で第9次調査になる。調査は店舗用地造成に伴う事前調査で、昭和60年8月から11月にかけて約2,500㎡を対象とし実施した。

遺跡はかつての姉川の河道をとどめる大井川の周辺に立地し、起伏の少ない扇状地性である長浜平野の中でも低湿な地域に位置する。

調査の結果、南北方向にのびる24条の溝状遺構、19の土坑を検出した。溝状遺構は幅1.5m、深さ0.2mで底面が平坦である。遺物は弥生前期の土器と共に農耕具などの木製品が出土した。出土した土器はほとんど弥生時代中、新段階に相当し、東海地方の特色を有するものも含まれている。

前回までに実施した調査で確認している溝状遺構と今回の調査で確認した遺構とのつながりが明確になった。幅約1.5mの溝状遺構が少なくとも7条以上、約40mは南北方向にやや東へ彎曲して存在していたことが確認できた。溝状遺構の性格についてはまだ検討の余地があるが、環状に近い形で存在していたことが考えられ、遺構の遺存状態や遺物の出土状況から、自然水路とは考え難いことから水田に伴う灌漑施設か環濠のようなものであった可能性が強い。出土遺物中、農耕具を含む木製品のほとんどが未製品であることも、

溝状遺構の性格を解明する手がかりになると考えられる。

以上のように、長浜平野における初期農耕遺跡としての位置づけが明確になり、弥生時代前期のまとまった資料を得ることができた。

(長浜市教育委員会 音田 直記)



第9次調査区近景 溝状遺構

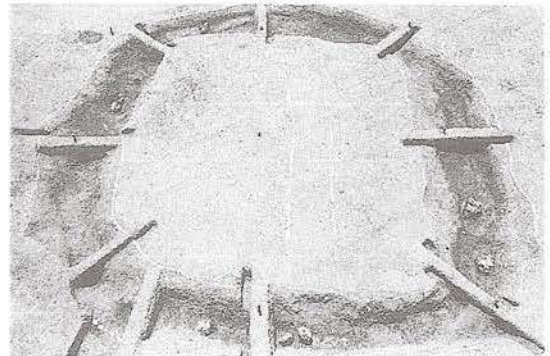
## 10. 昨年に続き方形周溝墓8基を検出

長浜市大茂亥 鴨田遺跡

団体営は場整備事業に伴う事前調査で、今回は昭和59・60年に続く3年次目の調査である。調査対象区域は遺跡の東部で、排水路予定路線(月ノ町地区)と、工事によって削平を受ける区域(的場地区)の合計2,300㎡について調査を実施した。

月ノ町地区では、弥生時代後期の溝状遺構および弥生時代後期から平安時代の遺物を包含する沼状遺構を検出した。

的場地区は田圃中に畑や雑木林として一段高くなっている区域で、昨年度調査した厨子地区の南側にあたる。検出した遺構は、弥生時代と鎌倉時代以降のものがある。弥生時代の遺構は方形周溝墓で、中期～後期のもの8基である。主体部は未検出である。その他溝状遺構や土坑等を検出した。鎌倉時代以降のものとしては、3間×3間、2間×2間の掘立柱建物、溝状遺



的場地区・方形周溝墓

構や土坑がある。

遺物は、方形周溝墓の周溝内や土坑から出土した土器が大半を占める。その他は、土師器皿、陶器等である。

以上の結果のなかで、方形周溝墓は昨年度の調査と合わせると13基を数え、遺跡の北東部にあたるこの付近に、弥生中期～後期に墓地群が存在していたと考えられる。方形周溝墓を造営した集落の中心は、昭和46・59年度の調査で同時期の遺物が多量に出土した遺跡の南西部をあてることができよう。

(長浜市教育委員会 中井 寛明)

## 11. 中世の塚

### 長浜市加田 金剛寺遺跡

金剛寺遺跡は、長浜市加田町に所在する。県営は場整備工事の切土対象となる2基の塚(鏡塚、撞木塚)と水路敷の部分約1,300㎡について調査をおこなった。

塚は堂ノ内という小字を持つ水田中に2基が近接して現存している。

鏡山(円丘)は、裾部の長軸7m、短軸6.5mの不正な円形であり、現地表面上では70cmの高まりを持っている。しかし、立地する旧遺構面は現地地表下60cmであり、築造時は高さ130cm程度の墳丘であったと推定される。封土は2層に分かれるが、しまりが悪く、つきかためながら盛上げた形跡はない。封土の中から12世紀後葉の山茶碗が出土している。封土を取除くと、旧地表面に敷並べたような状態で土師器皿26枚が出土した。この土師器皿は12世紀後半代のもつと見られる。

撞木山(長方丘)は、裾部の長さは3.5m×13mであり、現地表面上では60cmの高まりを持っているが、立地する現地地表下の旧遺構面からは、120cm程度の高まりとなる。封土の断面は5層にわたり、つき固めながら築成されている。第2層は特によくつき固められている。この2層からは、12世紀後半の白磁碗が出土している。



SE001木器出土状況

塚の北方の水路敷のトレンチで検出された井戸は、直径95cm、深さ100cmで、弥生時代後期の土器(甕・高杯)、木製クワ、木製ハシゴが出土している。

中々山の周囲に設けた水路敷のトレンチでは、自然河川が2本検出されている。両河川とも北方から流下してきたものと考えられ、弥生時代後期の土器が多く出土している。

(湖沼賀県文化財保護協会 稲垣 正宏)

## 12. 弥生時代後期の方形周溝墓か？

### 長浜市榎木 松塚遺跡

県営は場整備事業に伴う調査である。施工区は榎木町集落の東を限る南北の道路から東へ200m幅、南北900mに及ぶが、その一部に古墳群がかかることが予想されたため試掘が行われた。その結果、当初の予想に反して古墳群の近くでは山茶碗等の遺物包含層が検出されたにとどまり、集落の北500mで、弥生時代後期末を中心とする時期の溝跡10条程度、集落の北東300mで弥生時代前期の土器を含む沼沢地状の落ちこみをそれぞれ検出するに至った。



字下日ウラ地区溝群

弥生時代後期の溝跡が見つかったのは字下日ウラ地区である。当地区は姉川まで300mの近きにある。溝跡のうち、3条はあるいは姉川の洪水を思わせる砂礫によって埋没しているが、残りは粘質系の埋土をもつものである。調査区幅が1.8m程度であるため、断定はできないが、粘質系の埋土をもつ溝の内には、2条一組で実際には周溝墓を形成している溝の部分と考えられるものもあり、近辺に所在する国友、越前塚等の遺跡との関係が今後問題となろう。

弥生時代前期の沼沢地状の落ちこみがみられたのは字ヨコマの北西部である。現地表面の標高は110m前後を測り、川崎遺跡等とは若干の比高差があるが、姉川流域の旧後背湿地の一つと考えることができ、そのため、比較的早くから弥生人達の生業の舞台となったものと理解されよう。出土した土器には、多条のヘラ描沈線をもつ弥生前期に通有なもの他に、伊勢湾地方との交流を示す器種もある。

(湖沼賀県文化財保護協会 浜崎 悟司)